

大阪商業大学学術情報リポジトリ

〈手塚治虫による現代社会への伝言〉 共同参画社会
の先駆者— 手塚治虫の哲学・思想そして宗教観 —

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学共同参画研究所 公開日: 2023-09-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷岡, 一郎, TANIOKA, Ichiro メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/2000369

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



〈手塚治虫による現代社会への伝言〉

共同参画社会の先駆者

— 手塚治虫の哲学・思想そして宗教観 —

大阪商業大学 学長
公共学部公共学科 教授

谷 岡 一 郎

1. はじめに
2. 思想・哲学／宗教観
3. 未来社会の預言者
4. 現代日本の問題

1. はじめに

手塚治虫（以下、「手塚」と表記する）は、言わずと知れた「漫画の神様」とも言える存在である。その作品群は多岐にわたり、扱うトピックや題材も多士済済であるが、決してバラバラとか、とりとめがないというイメージはない。それは手塚の作品群の背後を貫く、「大きな思想・哲学の柱のようなものが常に存在する」からだとする指摘は、おそらく正しい。本稿は、その思想・哲学がどのようなものであるかを考えることが主目的である。なお文中において、あたかも手塚がその考えていたと断定するトーンの文言も登場するだろうが、あくまで筆者がそう考えているだけで、手塚から直接聞いたわけではない。単なる類推・推論である。また他者による意見は、一応出典を提示しておいた。

共同参画社会の予見

現代において手塚作品を読み返すと、驚くほど多くの「現在において大きくなりつつある社会問題」を扱っていることに気づかされる。ロボットや人工知能の問題、(LGBTを含む)性の平等の観点、人種差別問題、環境問題、宗教戦争、新たな病気の予言、等々。これらはすべて、

我々が現在直面する問題でもあるが、手塚はこれらを半世紀も前に扱っていたのである。あらためてその先見性には驚かされる。

あとで詳しく解説するように、その思想・哲学には一本の太い芯として、おそらく手塚独自とも言える「宗教観」があり、そこから演繹される論理的帰結のような細目—「手塚のサブ・哲学」とでも呼んでおこう—が存在するのではないかと考えている。それらは人間の本質というものに対する、手塚の基本的な考え方から派生されるものであるが、もう鬼籍に入れられた手塚自身に聞いたわけではないので、あくまで筆者の「そうだったのだろうか／そうだったかもしれない」というレベルの話である。むろん、10人おれば10通りの「手塚の思想・哲学」の解釈が存在してもおかしくはない。

本論文は、手塚のサブ・哲学のうち、「共同参画」というキーワードに関する作品を考える機会とする。関連があると思われるコンセプトを扱った作品をいくつか選び、その解釈に加えて、現在の日本社会が抱える問題について考える。ただし、手塚の根本的な思想・哲学—特に宗教観—は、全体のトーンに大きく関わってくるため、まずその内容から進めるのが正しい順番かと思う。

2. 思想・哲学／宗教観

手塚作品を読んだ読者の多くは、読み終わった後に「う～む、よくわからないが、何か考えさせられる」という気持ちにさせられることが多い。それは児童向けの漫画にせよ、成人向けの漫画にせよ、知らず知らずのうちに手塚の思想・哲学が作品中ににじみ出ているからだろう。むろん行間（と言うより「コマ間」）にあって、書かれていないメッセージも少なくないはずである。

まず注目すべきは、手塚は人間（および生物）のすばらしさを認識しつつ、「決して人生というものが、バラ色の楽しいものばかりであるとは考えていない」点であろう。どちらかと言えば、人生や運命に対する悲観的な思いの方が強いようで、それは手塚作品にハッピーエンドのものが多くない点にも示されているようだ。

たとえば『鉄腕アトム』は、アトムが人類の危険を避けるため、冷却効果のある物質とともに、暴発しつつある太陽に飛び込んでいくシーンでシリーズが終わる。『ジャングル大帝』にしても、主人公のレオがヒゲオヤジのために、自ら命を絶つシーンがラストの回（図-1参照のこと）にある。どちらも子どもに向けた作品であり、手塚初期の代表作でもあるが、あえてハッ

ピーエンドにしない点が手塚のこだわりなのであろう。生けとし生けるもの（ロボットも含む）は必ず死ぬということ、そして生きているものは、多かれ少なかれ過去の人々の犠牲の上に立っているのだよ（これについては、あとでもう一度述べることになる）とのメッセージであろう。

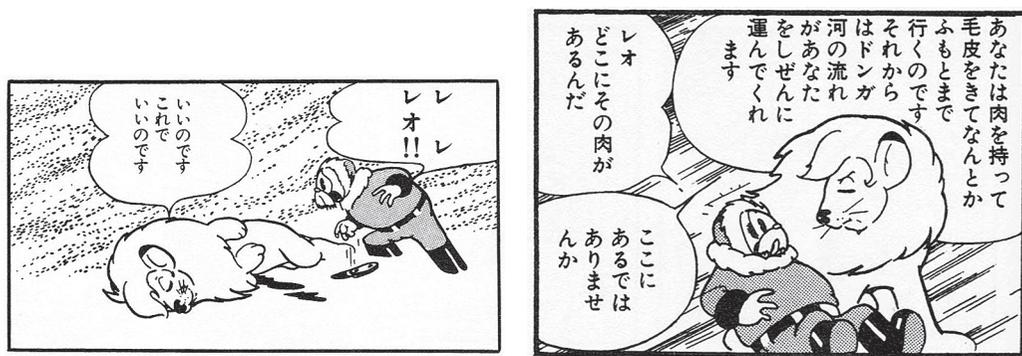


図-1

『ジャングル大帝（下巻）』@TEZUKA PRODUCTIONS、学習研究社、1990

もし、「ひと言で手塚の思想・哲学を述べよ」、と筆者が問われたなら、それは「人類および自然界に対する愛」ではないかと考える。その結論に至るまでの、筆者なりの理由は順次述べるつもりであるが、まずは「宗教観」という最も重要と考えられるキーワードから始めよう。

宗教観

主要作品のひとつ、『ブッダ』が比較的良好に知られているがゆえに、「手塚は仏教思想を根底に持っている」と信じている人は少なくない。それは一面の真実ではあるものの、手塚の宗教観は必ずしも仏教思想と同一のものではない。

手塚の思想・哲学に、仏教思想から組み込まれた最大のコンセプトは、おそらく人や生き物は親から子、子から孫へと命を（生活を）つないでいくものだとする、いわゆる「輪廻」の思想—これ自体は、仏教がインドの古宗教（バラモン教）から採用した概念であり、仏教で考え出されたものではない—であろう。ただし手塚のそれは、個々人の輪廻ではなく「血統の輪廻」のようなコンセプトだと考えてほしい。そのプロセスにおいて、生物たちが生きていくための食物連鎖（Circle of Life）はあっても当然であるが、「生存目的から外れた無用の殺生は許されない」との見解を採る。つまり猫がサンマを盗んで子猫に食べさせたり自分の空腹を満たすなら、それは猫の倫理として間違っていない。その猫はなんら悪いことはしていないため、次に人間などに生まれ変わることもありうるのだ。手塚の言を借りるなら、「自分の快樂のために（不必要に）他人を殺すのは、人間だけだ」とも主張する（『ブッダ』、アシタカ仙人の言葉より）。



図-2

『手塚治虫文庫全集 ブッダ①』@TEZUKA PRODUCTIONS、講談社、2011

『きりひと讃歌』という作品は、その名が示すとおり、基督教の教義をメインの題材としているが、『ブッダ』のように伝記をなぞった話ではない。(ただし手塚には『旧約聖書物語①～③』という純粋に基督教の作品もある。こちらは伝記)。

基督教の教義から、手塚が自分の思想・哲学に取り込んだと思われるコンセプトは、「人間とは元々罪深い生き物」であり、それがゆえに「贖罪(ゆるし)が必要」であるとする考え方であろう。少なくとも『きりひと讃歌』を読んだ、筆者の感想としてはそのように感じられるのである。

基督教ではイエス・キリストが、人々の罪を背負って十字架に架けられた。人はキリストを信じ、あがめる(いくつかの条件を満たす)ことで、そのご利益の一端に預かることができるわけである。手塚の「ゆるし(以後、この語を使用する)」の思想は、人が人に対するものであるべきだと考えているフシがある。このゆるしの思想から派生する、手塚の他の下部思想(サブ・哲学)はいくつかあるが、それは本稿の後段部分に廻すことにして先を急ごう。宗教の話の続きである。

日本古来の宗教は、いわゆる「神道」だ。明治期の神仏合同の政策が施行され、結果として日本人の多くが、仏教と神道を混同しがちになってしまっている事実はさておき、やはり日本固有の宗教は神道である。内容や教義を融合・混同してしまった寺や神社もあって、ややこしい問題であることもそのとおりだが、神道と仏教は元々は異なる宗教なのである。

仏教はゴータマ・シッダールタ(仏陀)を始祖とし、その教え(戒)を守ることが教義となっ

ている。ただし、仏陀本人をも含めて、信仰の対象はただ1人の神（仏）というわけではない。その点では多神教の一種と考えられるが、そもそも仏教徒は極楽（キリスト教の天国）に行ったりする目的があるわけではなく、法（万物のあり方）に従う「悟り」を開くことが個人の目的であるから、別段特定の神仏を崇めたり、複雑な儀式を行なう必要すらない。論理的には、仏教では実体のあるものなどはなく、一斉が「空」であるはずであるから、極楽浄土や阿弥陀仏といえど、実体として存在しないと（少なくとも仏教の原始形では）考えてよいのである。このあたりいろいろな解釈があるので、どれも絶対とは言いがたい面があるのも事実である。

その点は神道も同じで、神道はすべてのものに霊が宿るとする「アニミズム」的な考えが基礎にある。従って神社で、天照大神や大国主命などを祀るのも、やはりシンボリックなものにすぎず、絶対的なものではないだろう。ひと言で表現するなら、神道は「真理はひとつとは限らない」と考える多神教を中心とした、自然や民族、そして祖先などを敬う行動原理の一種ともいえるものである。生活と自然に感謝する思想と考えてよく、天皇家（天孫）は最高祭祀者として、その儀式の営みを継承しているという位置づけである。

手塚の『ブッダ』を読む限り、手塚の宗教の中心部分は仏教思想などと考えがちであると述べたが、手塚のもうひとつの代表作『火の鳥（太陽編）』を読むと、その考えが間違っているように思えてくる。『火の鳥（太陽編）』では、神道の氏神（土着の神々）と日本に新しく入って来た仏教の神々との間で争いがあり、手塚は明らかに土着の神々に肩入れしているからである。



図-3

『火の鳥① 太陽編（中）』@TEZUKA PRODUCTIONS、角川書店、1992

その他の短編（たとえば「モンモン山が泣いてるよ」や「マンションOBA」）でも、自然界に定着している霊的存在を好意的に描いているし、手塚の原点とも言える『ジャングル大帝』にも、そのようなシーンはいくつか登場する。

手塚的アミニズム

結論的に言えば、手塚の信じる宗教（というものがあるとして）は、「神道のアミニズム的な概念を中心とし、仏教の輪廻の思想とキリスト教のゆるしの教えを加えたもの」と言えるだろうか。早い話が（あくまで筆者の意見であるが）人間とは矛盾や悩みを抱えた存在であるが、それでも前進を続け、成長していくものだ（いかなければならない）という、（宗教として考えるなら）一種の人間讃歌にも似た、アミニズム的な宗教（「手塚的アミニズム」と呼んでおこう）なのである。

「手塚的アミニズム」として、特定の霊の存在を物理的に信じていたわけではないだろう。手塚は医者免許も持つ、科学マインドの進んだ教養人であったがゆえに、実証できない観念的な事象を心底信じることはなかったと考えられるからである（漫画家みなもと太郎（1997）によると、手塚本人も「迷信は信じない」と述べているという）。

手塚の人間讃歌の本質は、まず「人間とは弱いもの」であることを認めることからスタートする。同時に弱さを克服すべく努力を重ね、人間は「成長していくもの」だとも考えているふしがある。

人間の弱さは一特に他人のそれは一その者が後悔し・反省し、改善の努力をする限りにおいて、許してあげるべきものだという考え方もまた、その思想・哲学の中心的課題である。ある面で手塚は、人間の弱さを肯定的に捉えていたのではないか、と考えることすら可能で、言うなれば「その弱さゆえに人間とはすばらしいものだ」ということである。

釈尊など一部の人間を除いて、完全な人間など存在しない。そのような中でも理想の姿がありうるとすれば、それは自然の摂理のままに生き、他人のために自らを犠牲にすることすら躊躇しない人間（あるいは生き物）であろう。これについては多くの証拠が作品中に存在するが、本論文の主題から離れていくため、これ以上の言及はやめておく。

まとめると手塚の宗教および思想哲学（手塚的アミニズム）は次のようになるだろう。

手塚の思想・哲学／（宗教）

- ・自然の営みを大切にする（自然の摂理）。 （神道）
 - ・人間とは弱い存在である。
 - それは自然なことである （キリスト教）
 - でも弱さは克服する努力をすると良くなるかも （仏教）
 - 他人（自分）をゆるすべし （キリスト教）
 - ・人間は（血統は）生まれ変わることができる。
 - （疑似的）輪廻の思想 （仏教）
- ・人生はすばらしいものだ。
 - 科学の発展は社会のために…
 - そして次世代へつなげるために… （手塚的アニミズム）

以後の議論は、この表に示された手塚の思想・哲学をもとに進めることになる。

3. 未来社会の預言者

手塚が「今のSDGs（17の目標）の多くを先取りし、半世紀前にすでに正しい方向性を主張していた（少なくとも作品中で訴えていた）」と指摘しているのは、手塚賞も受賞している漫画家で、お笑い芸人（吉本興業）としても知られる矢部太郎氏である（2021年12月18日、淡路島におけるシンポジウムにおける発言）。

SDGsの17の目標は、国連主導で提唱されているため、発展途上国特有の問題も含まれている。「栄養不足の解決」とか「安全な水とトイレの確保」などは、日本には少しあたりまえすぎて、もうすでに政策的に目標とするような問題とは考える必要のないものである。「健康と福祉」や「質の高い教育」など、「（「まだまだ」と考える人がいるのは理解できるが）すでに国際標準で高いレベルにある項目もいくつか存在する。つまり日本が今後の目標として力を入れるべきは、17の目標の一部で、おそらく次の5点が中心と考えられる。

SDGs	目標	Keyword
5	ジェンダー平等	「ジェンダー」
7	クリーン・エネルギー（への移行）	「環境」
8	働きがい（と経済成長）	「生きる目的」
10	人や国の不平等をなくす	「差別」
13	気候変動対策	「環境」

7のクリーン・エネルギーと13の気候変動対策は、ともに環境問題であり、近い将来への具体的な施策としては、どちらも二酸化炭素（CO₂）の排出量を減らすことが中心となるだろう。つまり7と13を同じ項目と考えれば、Keywordとしては4つあると考えてさしつかえない。

手塚はこれらの問題をすべて網羅し、一定の主張を展開していることを順に示すことにしよう。

ジェンダー—LGBT—

神の国の天使、チンクは神様の手伝いをしていて、生まれてくる子どもの性別の分類をしていた。少々そっかしい面があったチンクは、青（男）のハートをすでにピンク（女）のハートを入れて女の子に決まっていたある子どもの体内に入れてしまう。その子どもはある王家に生まれ、サファイヤ姫と名づけられる…。言わずとしれた手塚初期の代表作のひとつ、『リボンの騎士』の第一話の内容である。



図-4

『リボンの騎士 第1集』@TEZUKA PRODUCTIONS、講談社、1989

男性のような女性、女性のような男性は、今もむかしも一定数存在したはずであるが、一種の社会現象として認知され始めたのは、21世紀に入ってからではなかろうか。トランス・ジェンダーというのは、生物学的に男性であるものが、実は自分は女性の心を持つ女性である（女性になりたい）と考える現象、あるいはその逆に生物学的な女性が、自分は男性だと考える現象である。よく見かける女装・男装の人々とは、（完全に）質的に同じとは言い難い。こちらは心の問題というより外面的なものが中心である。

男女の役割や、外見が変化するという考え方は、むろん手塚が最初に世に出したというわけではない。しかし戦争中や戦後すぐの時期においては、やたらイバリたがる人々が、そのような風潮を実質上禁止してしまっていたも同然だった頃の話である。そんな時代にここまでの表現を可能にしたのは、イバリちらす人々への反発もあっただろうが、もうひとつ、手塚が宝塚に住んでいたことも関係しているかもしれない。

宝塚歌劇場で、凛々しい男性役を演じていたはずの人間が、1時間後に美しい女性として街を歩く。手塚は日常空間で、そのような光景をよく体験していたがゆえに、トランス・ジェンダーにそれほど抵抗はなかった可能性がある。『どろろ』の主人公のどろろは、表面的には元気な男の子に見えて、実は女の子だった。そしてもう1人の主人公の百鬼丸に対しラストシーンで、「一緒に連れて行ってほしい」という気持ちを訴えようとするが、悪口しか出せない性格のどろろはそれをうまく伝えられない。2人はこうして、別々の道を行くことになるシーンで終わる。おそらくボーイッシュな女の子は手塚の好みであり、表現方法として得意ワザのひとつもあっただろう。

宝塚とは逆方向のトランスフェージェンダーである「歌舞伎」に対し、手塚がどれほど親しんでいたのかはよくわかっていない。少なくとも『火の鳥〈羽衣編〉』を読む限り、狂言や能の知識はある程度あったようだ。

『MW（ムウ）』という作品は、男性どうしの恋愛感情をメインテーマとしている作品である。また手塚作品には、人間と動物、人間と植物、人間と宇宙人、はたまた人間と妖怪との恋愛物語すらあり、おそらく性の自由度に最も寛容なタイプの人間であつたと考えてよいだろう。今ではそれほど珍しいものではないが、半世紀前にはかなり進んだ考え方であつたのは間違いない。

環境問題

手塚は環境問題についても、早くから警告を発し続けている。講演や発言、記事などをまとめた『ガラスの地球を救え』という著書（マンガではない）では、次のように述べている。

「SF映画や小説、マンガには核戦争や大気汚染で、人類がついに滅亡する物語は数多くあるけれども、もうフィクションの世界のことではなくなりつつあります。こうなってしまった以上、まだ間に合ううちに言っておきたいやむにやまれぬ気持ちがある、ぼくの中で動いています。

なにしろ、地球上で最も清浄と思われるようなヒマラヤ山頂や南極大陸、七つの海にまで汚染は広がり、アフリカ、タイ、フィリピンなど、回復不可能なまでに森林が姿を消しています。

またフロンによるオゾン層の破壊で（中略）科学の進歩は、本来人類に幸福をもたらすはずだったものです。ところが、いまでは地球を痛めつける悪い奴になってしまった。かつて荒唐無稽だと笑われたこともあるぼくのマンガどころの騒ぎではおさまらない、危機的状況といわざるをえません。」

（前掲書、P.19-20）

これは我々への警告であろう。「マンションOBA」や「モンモン山が泣いている」という短編も環境問題がメインテーマである。



図-5

ここに挙げたカットは、短編の『ライオンボックス③』からの「マンションOBA」と『タイガーボックス④』の「モンモン山が泣いてるよ」のものである。手塚本人を登場させ、人類による

自然破壊に反対である態度を表明している。どんな動植物も生けとし生けるものであり、人間の勝手な都合で（不必要に）切ったり倒したりしてはいけないのだと。

差別

人間をその肌の色や民族、国籍、宗教・思想、そして以前にも触れたジェンダーなどで差別することは許されない。今でこそあたりまえのように唱えられる基本的人権のイロハであるが、手塚が生きた20世紀とは、そんな差別があたりまえの世界だった。むしろ21世紀の今でも、いくつかの問題はまだ解決されていない。

本人の努力でどうしようもない、「生まれつきの属性」による差別を、手塚ほど嫌っていた人間は当時としては（そしておそらく今でも）珍しいほどであるが、手塚の思想・哲学、そして宗教観からすると不思議ではないようだ。と言うのは、人間（および生物）の血統は輪廻に組み込まれて生まれ変わるのであるから、人間として（あるいは生き物として）やるべきことを真摯にやっておれば、次世代の光明が見えてくることになる。ここで言う「やるべきこと」とは、前に少し説明したが、他人の罪を（反省していたり、謝罪するなら）許し、自らは他人のために犠牲をいとわずに生きるということに相違ない。

逆にやってはならないのは、本人にとってどうしようもない属性によって、たまたま低いステータスであったり、それによって苦しむ人々に対し、いばりちらしたり、虐げたりする行為である。手塚本人もインタビューに答えて、「私は名刺で仕事をする人は嫌いです」（『ぼくのマンガ人生』（岩波新書、1997））と述べているが、これは医学の肩書を捨て、漫画家として腕一本で勝負を続けた手塚の矜持の言わせることかもしれない。というのも、（生まれつきの属性で差別することはむしろ許されないが）本人の努力次第で変えうる運命に対しても、手塚は差別することなくやさしい眼差を持ち続けていたように感ずるからである。肩書を好まなかった事実は、『ブラックジャック』が無免許の医者であったことにも象徴的に示されているように思える。

差別をメインテーマとした作品の代表は、『アドルフに告ぐ』であろう。これは神戸に住んでいた2人のアドルフ—1人はゲルマン系、もう1人はユダヤ系—およびもう1人のアドルフ（ヒトラー）を題材とする話であるが、かなり多くの資料をもとに書かれている。未読の人もあるであろうから内容には触れないでおくが、小さい頃に仲の良かった2人のアドルフ、そしてヒトラーたちが、時代の大きな流れに翻弄されていく話である。

他にも『一輝まんだら（未完）』、『シュマリ』、『どついたれ』、『グリンゴ』などは、メインテーマとして差別を扱っており、メインテーマとしてではなくサブ・テーマとして差別を扱った作

品一『きりひと讃歌』や『ブッダ』もその一種—も少なくない。

生きる目的

国連のSDGsの8番目は、「働きがいと経済成長の実現」という目標である。かなり性質の異なる2つの目標が同居しているようにも思えるが、後の部分は発展途上国向けのメッセージとして受け止めるべきなのだろう。おそらくこの項目で言いたいことは、「働きがい」のある職を得られる平等なシステム、そして少なくともそのように感じる心の持ち方を与える社会が重要なのだ、という点なのだろう。

当然の帰結として、強制されて行う苦役は働きがいのある仕事とは言えない。逆にたとえ貧しくとも、生きがいを持ってできる仕事は尊いものであり、それが天職ならなおのこと良い。

手塚作品に登場する人間—特にワキ役—たちは、損得を抜きにして、時として執念とも言つてよいほどの熱意をもって、自分の役割を演じることがある。特にワル役（別に悪くなくとも主人公の敵役）は、「なんでここまでやるか」というレベルの努力家であることが多い。『アドルフに告ぐ』に登場する文書を探す秘密エージェントしかり、『火の鳥』の準主役クラスしかり、少なくとも生きがいを持って自分の役割をしっかりと演じている。それはそれで尊いことである。

4. 現代日本の問題

将来に対し警鐘を鳴らし続けた手塚が、どの程度のタイムスパンを考えていたのかわからない。2020年代の日本が（我々が）それに応えきれているかと問われると、たぶん合格点はもたれない可能性が高い。

ジェンダー

量的な面で、日本の女性が社会で占める地位は、欧米のそれに比して明らかに後れを取る。国会議員、会社役員、大学教授、医者、弁護士など、社会を動かす中心的な職業に女性の名前を見ることは、極端に少ないのが現実である。

根本の原因を探るなら、（私見であるが）大学受験までの年齢で、「女性は男性と競うべきでない」とする社会的な環境によって、競争しようという意思が弱められているように思えることである。そのひとつの証拠は、東大・京大をはじめとする一応トップレベルと考えられている大学への合格数は、男性の半分以下となっていることが挙げられよう。隣国の台湾において、

最難関とされる国立台湾大学の男女比がほぼ50/50であることなどを勧告するならば、生まれついで能力やポテンシャルは男女同等と考えてよいはずだが、日本の女性は成長するまでのどこかで、能力の開発をディスカレッジされている可能性が高い。

環境問題

環境・エネルギーの分野につき、日本が遅れているのは事実だろうが、2021年の国際会議（COP21）であれほどの非難（遅れている国に与えられる「化石賞」を受賞）を受けるいわれはないように感じるのは、筆者だけではないだろう。

一つには、「1人当たりのCO₂排出量」を計算して比較したわけでないことがある。むしろ気候差や他の条件も異なるため一概には言えないことであるが、これまで石炭や石油をかなり非効率に燃やし、発展してきた国に言われる必要はない。

もうひとつのポイントは、戦後の技術革新において、日本は燃焼効率の良い車のエンジン、ハイブリッド車の先行実施、LED照明、リチウムイオン電池など、多くの技術的貢献をしたにも拘らず（しかも今も継続中である）、まるで評価されていないことだ。効率の良い大量移動手段である高速鉄道網も、日本が世界のお手本になっていることを忘れていてはなかろうか。もし日本のこれらの技術開発と先取の精神がなかりせば、（フォードやGMは喜んだかもしれないが、）環境への負荷は今よりかなり大きなものとなっていたであろう。

先ほど『ガラスの地球を救え』で「科学の進歩は、本来人類に幸福をもたらすはずだった…」とのメッセージを紹介したが、手塚は、科学の発展は「人類を幸せにする方向でなければならない」と考えていたフシがある。アトムに代表されるロボットやAIに関しては、おそらくこれから社会問題化するトピックのひとつであるが、たとえば「ロボット」という語に対し、ネガティブな感情が最も少ないのは日本だと信じている。それは「ロボットは友だち」という意識を植えつけてくれた手塚の貢献のひとつであろう。

日本の環境問題への取組みが合格点だと言っているわけではない。原子力の事故に対する取組み、電気自動車普及率、フードロス、埋め立て等々、解決すべき問題は山積している。最近も危険な土砂崩れによって、多数の死者を出した事件が起こったのは記憶に新しい。手塚が今の日本を見たなら、少々悲しむだろう。

気候以外にも、「海の資源の問題」は新たなトピックである。ただしこの分野においては、つながった海を持つ近隣諸国のルール違反にまで強制力が及ばないことも大きな問題であり、日本だけが責任を負うべきとは思えないことであるのは確かだ。

差別

ジェンダー以外の差別もまだまだ日本に、あるいはどの国にもあるだろう。住んでいる地域や肌の色や国籍による格差、いじめ問題、ヘイト・スピーチと、まだまだ解決すべき問題が残る。それでもセクハラやパワハラや告発や、差別発言への社会の注視レベルは、年々向上しているようにも思える（個人の感想）。しかし同時に、ネット上の非難や中傷など、これまで存在しなかった類の行為が増えている面も、また事実である。それら非難や中傷が公平なものならまだしも、一方的で不公平なものも少なくない。

手塚は（以前にも少し言及したが）、本人の努力の結果として生じた格差については（完全には）否定していない。たとえば教育の格差について考えるなら、ある程度アクセプトしているものと思われる。ただどこまでの格差が許された範囲であるかは、作品からはわからない。繰り返すが、属性による差別に関しては、決してあってはならないと考えているようだ。

手塚が今の日本を訪れたと仮定して、少なくとも差別に関しては、優秀点はもらえなくとも及第点くらいはもらえるものと信じている。ただ前述のように、まだまだ解決すべき点も少なくないことは認めざるをえない。

生きる目的

現代の日本社会を手塚が見た場合、最も落胆する項目は「生きる目的」ではないか。というのは、特に若い人々を中心に、何のために生きるか、いかに生くべきか、という感覚が伝わってこないからである。筆者は日頃から、若者たちと接する機会が多いが、早い話が「目が死んでいる」のである。

筆者が考える根本原因は、「偏差値中心で暗記を重視する教育システム」にある。その教育システムは基本的に受け身であり、教科書で扱う内容以外の何かに秀でた才能（ポテンシャル）は、埋もれてしまって消え去る傾向にある。出題範囲の定まった共通テストは考える力を奪い、情報の受け身オンリーの生活はスマホによってさらに拍車を掛けられている。ここにおいて、一定知識のある（先生から見た）良い子は増産されるが、つき抜けた知恵は生まれてこないものなのである。

「人間いかに生くべきか、そしてなぜ…？」という問いは、手塚がその作品群を通して発し続けたものである。むろん手塚の答えを正しいと考える必要はなく、各自が決めるべき問題である。しかし今の日本人は、考える入口ですでに迷い道に入ってしまったのだ。

為政者たちは、はぐれ値を嫌う傾向にあり、「皆が同じになればよい」と考える良くない傾向がある。しかしイザという時に国を救うのは、こうしたはぐれ値—あえて「つき抜けた人間」

と呼ぶべきか—かもしれないのである。それは明治維新などの歴史が証明してきたことでもある。

ここにおいて私立学校こそ、(私見であるが)独自の教育を展開し、日本に新しい価値—特に「生きる目的」—を作り出す役割を果たさなければならないのだと信じている。

【参考文献】

- みなもと太郎『お楽しみはこれものじゃ』河出書房新社（1997）
- 手塚治虫作品『火の鳥①〈太陽編〉（中）』角川書店（1992）、p.191、p.206
- 『火の鳥〈羽衣編〉』角川書店（1992）
- 『リボンの騎士 第1集』講談社（1987）、p.8-9
- 『手塚治虫漫画全集124、タイガーボックス④』「モンモン山が泣いているよ」講談社（1979）、p.37
- 『手塚治虫文庫全集ブッダ①』講談社（2011）、p.209、p.350
- 『手塚治虫漫画全集63、ライオンボックス③』「マンションOBA」講談社（1977）、p.10
- 『ジャングル大帝（下巻）』学習研究社（1990）、p.261、p.263
- 『ガラスの地球を救え』光文社（1989）、p.19-20
- 『旧約聖書物語①②③』集英社（1996）